スポーツと都市　1

—— ヨーロッパのワールドカップ開催都市 ——

寺阪　昭信

1　はじめに

2002年6月にアジアで初めてのワールドカップが日本と韓国で共催という形態で行われた。その折りに大学が主催する「スポーツと文化」というタイトルの公開講座で話す機会が与えられた。5人で分担したために十分にまとまった話が出来なかったが，その準備過程で調べたことのうち，ワールドカップ開催都市がそれぞれの国においてどのような地位にあるのか，都市システム，都市の順位規模法則とサッカーを結びつけて検討してみた。ここ数年アーバンツーリズムという枠組みのもとで都市間競争と言う視点からヨーロッパ都市の活性化に注目してきたが，ワールドカップやオリンピックなどの巨大スポーツイベントを誘致することはそれぞれの都市にとって一つの強力な競争の武器となっている。アーバンツーリズムの中ではまだ十分に検討されてこなかったスポーツイベントについて，主としてヨーロッパで開催されたワールドカップ，すなわちスイス，スウェーデン，ドイツ，スペイン，イタリア，フランスの6カ国の都市を中心に検討してみたいと思う（図1）。

ヨーロッパ諸国において最も普及した重要なスポーツがサッカーであり，その頂点にワールドカップがある。スポーツと都市という観点からその予選もまた地域ごとに重要であるし，それなりの観客を集めるが，ここでは資料の制約から予選を除いて本大会に限って，また筆者の地域に対する関心およびフィールドの経験などからヨーロッパを中心に話を進める。もちろんヨーロッパで開催された都市の全てを訪れたわけではないが，1998年にはフランスに滞在していて現地で見る機会もあったし，イギリス，イタリア，スペインなどでこれに関連したサッカー場を訪れたこともある。いま，このような形でまとめるとなると，もっと多くの都市で試合を見ておけばと良かったとも思っている。

一般的には大都市，サッカーの盛んな都市，強いチーム（複数の場合も多い）の本拠地である都市で行われている例が多いと見なせる。[1] 開催都市は直接的には，多数の観客を動員して集客力を高めることが出来るし，スタジアムの新設，改修がその後のその都市のスポーツ事業に貢献する。間接的には世界にその都市名を売り込むこともできてホテルの整備とともに，その後の観光開発や事業所誘致にプラスの効果が期待できる。

ワールドカップがオリンピックと異なる点は，第1に1930年代に始まるという，その歴史が相対的に短いことおよび，予選があることによって本大会への出場国が限られることから現在までの出場国が多くないこと。第2にオリンピックが基本的に1都市を単位として開催されるのに対して，ワールドカップは国単位であり，スポーツイベントとしての規模が大きいだけに国家事業であり，国の経済力と政治力が問われ，多数の都市がかかわり，地域・都市への影響が大きい。第3にこの規模とも関連するが，開催期間の長さがオリンピックは2週間であるのに

対して，ワールドカップは約１月かかっている。参加する選手ならびに開催する関係者の負担は経済的にも物理的（競技場の規模も大きくなるとともに屋根付にしなければならなくなったなど）にも大きいものがある。

大会そのものも回を重ねるごとに参加国が多くなり，本大会の規模と試合数もそれに応じて増えており，開催都市も多くなっている。開催都市の人口規模を取り上げるとき，本来ならば開催年の人口で論ずべきであるが，容易に入手できなかった部分もあるし，厳密には誘致活動期の都市を見なくてはならないが，現在の都市という視点も重要なので，現在の人口（1990～2000年）で論ずる場合が多いことを断っておく。

2　本大会開催国と出場国

１）開催国

ワールドカップ2002年大会は1930年の第１回開催から17回目に当る。これまでの開催国は15国に限られており，ヨーロッパが７国，南アメリカが４国，北中アメリカが２国，そして今回アジアで初めて２カ国共催の形式で開かれた日本と韓国を加えたことになる。イタリア，フランス，メキシコ（1986年はコロンビアの代わりとして）は２回開催していて，次回2006年開催予定のドイツも西ドイツ時代を合わせて２回目となる。本大会の規模が第１回ウルグアイ大会では予選無しの13カ国で始まり，次第に大会組織が整えられてゆき，本大会16カ国の参加数が長く続き（第２次大戦直後の1950年のみが13カ国），1982年のスペイン大会から24カ国，1998年からは32カ国が本大会出場となり，予選参加国数は200を超えている。開催国の優勝が６回，準優勝が２回，３位が２回と開催地の地元がなにかと有利な姿が読み取れる。

今後さらに出場国を増やして収入増と大陸別の割り当ての不満をそらそうとする動きがあり，2006年のドイツ大会では36になる可能性が検討されている。[2]そうなると資金，運営，会場等さまざまな面から今後小国が単独で開くのは困難となり，開催できる国が限られてくると思われる。今回，異例な形態であった日韓型共催が増える可能性が高い。

２）本大会出場国

本大会の出場国はかなり限られた国である。今回までの本大会出場国（FIFAの加盟基準による国と地域）数は69（表１）を数える。サッカーのもつ普遍性から予選参加国の多くは，国内でリーグ戦が定期的におこなわれていて，プロによるものも多い。ブラジルのように全大会に出場を果たしている国がある一方で，毎回初出場国が２つ以上存在する。１回のみの出場にとどまっているのが今回の初出場の４カ国を含めて20カ国ある。しかも今回でもそのうち中国，スロベニア，エクアドルは一つも勝てなかったし，本大会に出場できてもそこで勝つことの障壁は高いものであることは，98年に初出場した日本も十分に経験させられた。それゆえに，過去の優勝国が７国に限られているのも当然といえる。98年大会のクロアチア[3]が初出場ながら３位に入ったのは驚くべきことであり，優勝経験国のアルゼンチンともども同じグループに入った日本のくじ運の悪さを嘆くべきだったかもしれない。

これまでの本大会出場国を大陸別に見ると，ヨーロッパが30で，半数近くを占め，南アメリカ，北・中アメリカが各９，アフリカ８，アジア・オセアニア13ということになる。ヨーロッパとアメリカ大陸（とくに南アメリカ）が主導してはじめたのでこの両大陸で約７割，出場国の実績の上位を占めていることがわかる（表１）。

第２次大戦前にはアジア・アフリカの独立国は少なく，参加するのが難しかったことは確かであるが，1938年にオランダ領インドネシアの参加はそこでは注目される。このときは日本も戦争の影響を濃く受けて参加できないでいた。スポーツを盛んにすることができる経済的な背景と平和であるということが基底にある。チーム競技であるから個人競技が多いオリンピック以上に本大会へ参加出来るかどうかは国のスポーツのレベルが問われて，厳しい競争下に置

表1　ワールドカップ本大会出場国と成績

順位	国名	人口（千人）	FIFA順位	勝点係数	勝点	試合数	勝数	引分	負数	出場数	1 1930	2 1934	3 1938	4 1950	5 1954	6 1958	7 1962	8 1966	9 1970	10 1974	11 1978	12 1982	13 1986	14 1990	15 1994	16 1998	17 2002
1	ブラジル	159,884	1	9.4	150	87	60	14	13	17	0	0	3	2	8	1	1	0	1	4	3	12	8	16	1	2	1
2	ドイツ（西）	82,071	4	15.7	129	85	50	18	17	15		3	0		1	4	8	2	3	1	8	2	2	1	8	8	2
3	イタリア	57,523	14	17.9	103	70	39	17	14	15		1	1	0	0		0	0	2	0	4	1	16	3	2	8	16
4	アルゼンチン	35,672	6	21.6	77	60	30	11	19	13	2	0				0	0	8		8	1	12	1	2	16	8	0
5	イングランド	59,009	7		63	50	22	15	13	11				0	8	0	8	1	8			12	8	4		16	8
6	スペイン	39,323	2	14.2	56	45	19	12	14	11		8		4			0	0			0	12	8	16	8	0	8
7	フランス	58,607	3	9.4	55	44	21	7	16	11	0	0	8		0	3		0			0	4	3			1	0
8	スウェーデン	8,846	20	51.1	45	42	15	11	16	10		8	4	3		2			0	8	0			0	3		16
9	オランダ	15,604	5	27.6	43	32	14	9	9	7		0	0							2	2			16	8	4	
10	（旧）ユーゴスラビア	10,597	22	39.6	42	37	16	8	13	9	3			0	8	8	4			8		0		8		16	
11	ロシア（ソ連）	147,105	24	2.8	41	37	17	6	15	9						8	8	4	8			12	16	0	0		0
12	ウルグアイ	3,221	27	125.0	40	40	15	10	15	10	1			1	4		0	8	4	0			16	16			0
13	メキシコ	94,400	9	3.7	35	41	10	11	20	12	0			0	0	0	0	0	8		0		8		16	16	16
14	ポーランド	38,650	28	8.8	34	28	14	5	9	6			0							3	8	3	16				0
15	ハンガリー	10,153	58	32.3	33	32	15	3	14	9		8	2		2	0	8	8			0	0	0				
16	ベルギー	10,188	16	31.4	32	36	10	9	17	11	0	0	0		0				0			12	4	16	16	0	16
17	オーストリア	8,072	61	34.6	28	29	12	4	13	7		4			3	0					8	12		0		0	
18	チェコ（スロバキア）	10,304	13	26.2	27	30	11	5	14	8		2	8		0	0	2		0			0		8			
19	ルーマニア	22,565	28	11.5	26	21	8	5	8	7	0	0	0						0					16	8	16	
20	チリ	14,622	80	13.7	20	25	7	6	12	7	0			0			3	0		0		0				16	
21	デンマーク	5,284	11	37.7	20	13	7	2	4	3													16			8	16
22	パラグアイ	5,085	19	37.2	19	19	5	7	7	6	0			0		0							16			16	16
23	クロアチア	4,498	26	40.0	18	10	6	0	4	2																3	0
24	ブルガリア	8,306	38	20.5	17	26	3	8	15	7							0	0	0	0			16		4	0	
25	アメリカ合衆国	267,901	10	0.6	17	22	6	2	14	7	3	0		0										0	16	0	8
26	スイス	7,089	43	22.5	16	22	6	3	13	7		8	8	0	8		0	0							16		
27	カメルーン	13,937	17	11.5	16	17	4	7	6	5												0		8	0	0	0
28	スコットランド		59		15	23	4	7	12	8					0	0				0	0	0	0	0		0	
29	韓国	45,991	21	3.3	15	21	3	6	12	6					0								0	0	0	0	4
30	ポルトガル	9,802	12	15.3	15	12	7	0	5	3								3					0				0
31	トルコ	63,745	8	2.4	15	10	5	1	4	2					0												3
32	アイルランド	3,661	15	37.8	14	13	2	8	3	3														8	16		16
33	ナイジェリア	118,369	32	1.1	13	11	4	1	6	3															16	16	0
34	ペルー	24,371	78	4.5	11	15	4	3	8	4	0								8		8	0					
35	北アイルランド		111		11	13	3	5	5	3						8						12	0				
36	コロンビア	36,162	35	2.8	10	13	3	2	8	4							0							16	0	0	
37	モロッコ	27,310	36	3.3	9	13	2	4	7	4									0				16		0	0	
38	ノルウェー	4,406	23	20.5	9	8	2	3	3	3			0												0	16	
39	コスタリカ	3,464	18	22.9	8	7	3	1	3	2														16			0
40	セネガル	9,280	30	8.6	8	5	2	2	1	1																	8
41	サウジアラビア	19,494	39	3.6	7	10	2	1	7	3															16	0	0
42	日本	126,065	25	0.6	7	7	2	1	4	2																0	16
43	東ドイツ				6	6	2	2	2	1										8							
44	南アフリカ	43,336	31	1.4	6	6	1	3	2	2																0	0
45	チュニジア	9,215	41	5.4	5	9	1	3	5	3											0					0	0
46	アルジェリア	29,050	70	1.7	5	6	2	1	3	2												0	0				
47	ウェールズ		49		5	5	1	3	1	1						8											
48	イラン	60,694	34	0.7	4	6	1	1	4	2											0					0	
49	北朝鮮	22,837	117	1.3	3	4	1	1	2	1								8									
50	ジャマイカ	2,554	50	11.5	3	3	1	0	2	1																0	
51	キューバ	11,059	55	2.7	3	3	1	1	1	1			8														
52	エクアドル	12,175	33	2.5	3	3	1	0	2	1																	0
53	エジプト	62,011	42	0.3	2	4	0	2	2	2		0												0			
54	ホンジュラス	6,338	40	3.2	2	3	0	2	1	1												0					
55	イスラエル	5,836	44	3.4	2	3	0	2	1	1									0								
56	ボリビア	7,767	102	1.3	1	6	0	1	5	3	0			0											0		
57	クウェート	1,809	84	5.6	1	3	0	1	2	1												0					
58	オーストラリア	18,532	48	0.5	1	3	0	1	2	1										0							
59	エルサルバドル	5,928	82	0	0	6	0	0	6	2									0			0					
60	イラク	21,177	54	0	0	3	0	0	3	1													0				
61	カナダ	30,004	74	0	0	3	0	0	3	1													0				
62	アラブ首長国連邦	2,580	90	0	0	3	0	0	3	1														0			
63	ニュージーランド	3,761	52	0	0	3	0	0	3	1												0					
64	ギリシャ	10,522	46	0	0	3	0	0	3	1															0		
65	ハイチ	7,429	76	0	0	3	0	0	3	1										0							
66	コンゴ（ザイール）	48,040	63	0	0	3	0	0	3	1										0							
67	スロベニア	1,982	36	0	0	3	0	0	3	1																	0
68	中国	1,255,698	62	0	0	3	0	0	3	1																	0
69	オランダ領東インド	199,867	84	0	0	1	0	0	1	1			0														

注）年度の数字は順位　0は1次リーグ/予選どまり、1は優勝、2は準優勝、16はベスト16、8はベスト8を意味する
　出場国の順位は2002年終了時点、FIFA順位は2003年4月現在、網掛けは初出場を示す/アンダーラインは開催国、係数=勝点/人口10万人X100
資料：原田、後藤、松岡から作成

かれる。そのなかから毎回２～５カ国の初出場国が生まれている（第２回はヨーロッパで初めて開かれたために10カ国）。

南アメリカの古くからの独立国ではベネズエラのみがまだ一度も出場していないだけで，ブラジルは全大会に出場している最多優勝国，アルゼンチン，ウルグアイも２回優勝している。今回初出場のエクアドルと近年出場機会が少ないペルー，ボリビアを除くとその他の国はかなりの実績を残して複数回出場している。現在チリ，ペルー，ボリビア３国のみが南アメリカの中でFIFAランクの70位以下である。

ヨーロッパでは東ドイツのように消えた国もあるが，1990年前後の国際社会の大変動の中で，ソ連・ユーゴスラビアの解体にともない独立国が増え，そのうえリヒテンシュタイン・アンドラのような小国も含めて51国[4]がある中で，およそ２/３に当たる国は出場経験を持っている。１回のみの出場国は４あり，それを除くと40位以内に入っている。主な未出場国では最近の活躍しているウクライナ（現在のFIFA順位44位），フィンランド（同47位），スロバキア（同53位）などに今後出場の可能性があるであろう。

北・中アメリカ・カリブ海地域ではメキシコが12回，アメリカ合衆国が７回で最近４回連続出場経験をもち，また２回のコスタリカがベスト16という実績を持っている。特に前２国は第１回大会からの参加国であってベスト８までの実績がある。他方キューバ，ハイチ，ホンジュラス，ジャマイカ，カナダといった１回のみの出場国が多く，これからもさまざまな国が出場する可能性がある。

アフリカ53国では第２次大戦前の1934年にエジプトが出場してから，1970年のモロッコの登場まで空白期間が長い。1960年のアフリカの年以来次々と独立国となったが，その活躍は1986年にモロッコがベスト16位に入って注目されるようになった。初出場が1982年のカメルーンは1990年以来連続して４回出場して合計５回とアフリカ最多の出場回数を持ち，27位にランクされている。モロッコ４回，ナイジェリア３回と出場回数が多い国が増えてきた。しかしながら成績は2002年のセネガルのベスト８位どまりである。

アジア・オセアニアはアフリカよりもさらに遅れをとっていた。1966年の北朝鮮の奇跡的な８位という例外（アジア・アフリカのボイコットによる間隙をついて予選なしで出場し１勝１分け２敗）を除くと2002年の韓国が４位になるまで，サウジアラビアが1994年に16位になったほか全く目立った活躍がなかった。地域的には中東から５カ国，東アジア４カ国，オセアニア２カ国，東南アジアからは1938年のオランダ領東インド（現インドネシア）のみであり，韓国が最多６回とともに出場国は偏在している。アジアの成績は67試合で10勝（うち１つはPK勝），勝率0.149の低さにある。これに対してアフリカは74試合16勝で勝率は0.216であるからかなり数字の上でも見劣りする。[5]1998年にはアジアから初めて４カ国出場できたが合計12試合のうちイランがアメリカに勝ったのみで，１次リーグを突破することができずに世界との力の差を見せつけられた。2002年大会でも中国，サウジアラビアは１勝もあげられなかった。出場国のうちまだ勝点のない国が，アフリカはコンゴだけなのに対して，アジア・オセアニアは６国もある。かつてイギリスの植民地であったインド，パキスタン，バングラデシュなどの人口の多い国がまだ出場を果たしていないし，同じく人口の多いインドネシアも独立後は一度も出場できないでいる。

国の人口規模と出場国との関係を見ると（表１），人口１億人以上の国で日本よりも上位にランクされている国はブラジル，ロシア，ナイジェリア，アメリカ合衆国である。人口1000万人以下の国がヨーロッパ，南アメリカに多いことがわかる。その中で北ヨーロッパの準優勝を経験したスウェーデン，東ヨーロッパでベスト16以上に名を連ねる旧ユーゴスラビア，ポーランド，ルーマニア，60年代まで強かったハンガリー，２度の準優勝したチェコ（スロバキア）などや南米のウルグアイ，パラグアイなどの強

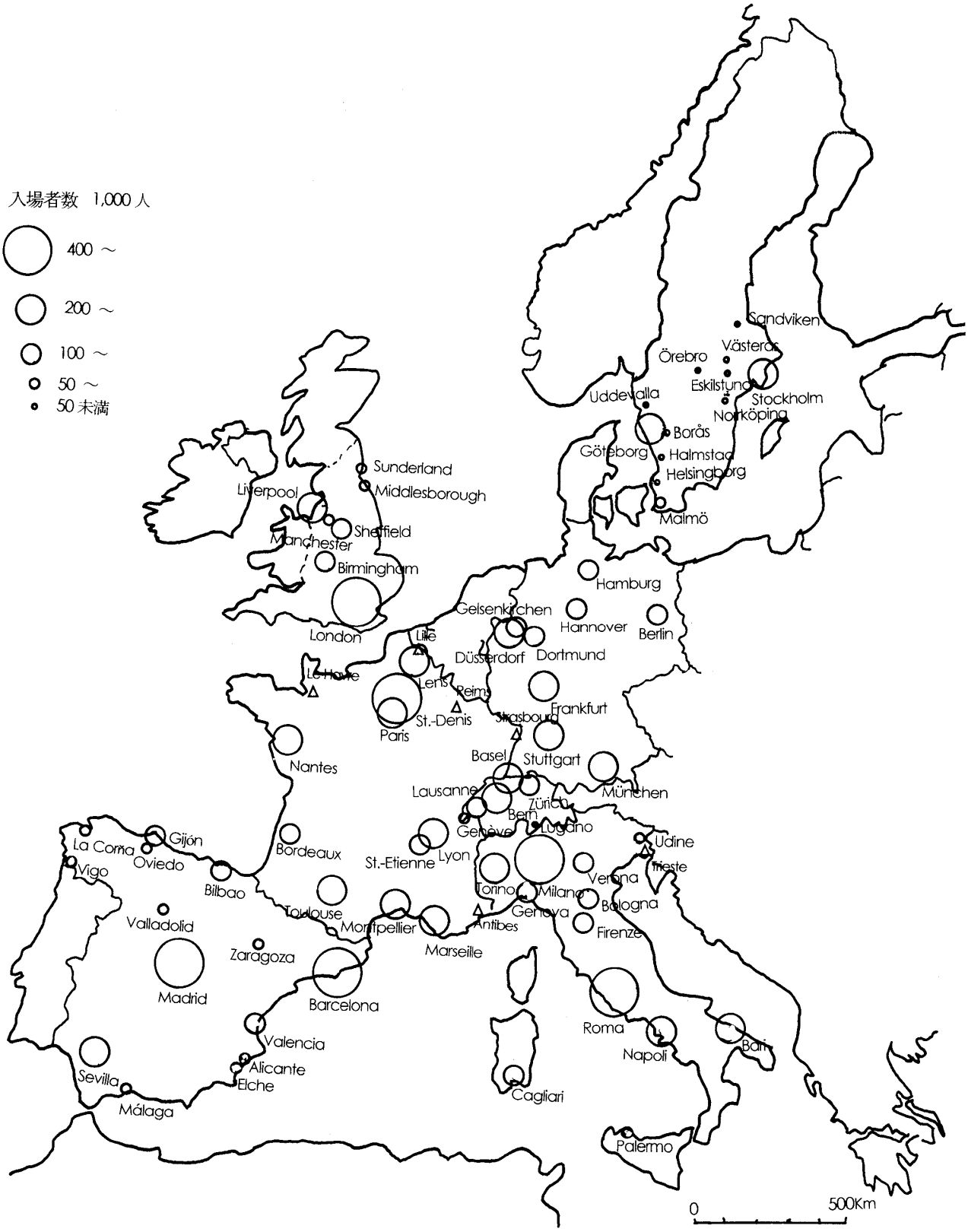

図1　ヨーロッパのワールドカップ開催都市

△印はイタリア1934，フランス1938年に試合が行われて2度目には行われなかった都市を示す

国がある。

サッカーの強さの地域差を検討するために，勝点を人口10万人で割りそれを100倍して勝点係数を計算した。国の規模としての人口当りどの程度サッカーが入り込んでいるかを知る目安である。人口が多ければサッカーをする選手が多くいても不思議ではないが，その中からうまい選手も出てナショナルチームが強くなるとは単純に考えられない。小国でも強いところはといった基準が計れないかという発想である。ウルグアイの125から勝点のない0まで，ヨーロッパの小国でサッカーが盛んといわれている国は25から50の間に多く見られ勝点係数の上位に位置する。人口の大きいドイツ，イタリアはポルトガルと同レベルの10台後半，フランスのようにそれほど盛り上がっていない国が人口の多いブラジルと同じ数値になる。[6]また日本とアメリカ合衆国とが0.6と同じであるのも興味がある。最近強くなってきた日本は韓国の3.3（サウジアラビアも3.6と似たような数値）と較べるとかなり見劣りがすることも分る。地域別の平均を出すと，西・北ヨーロッパ25.8，南アメリカ24.2，東ヨーロッパ（トルコ，イスラエルを含む）17.1，北・中アメリカ5.6，アフリカ3.7，アジア・オセアニア1.3という数字になり，ヨーロッパと南アメリカを軸に動いてきた歴史と実績による地域差がきれいに説明される。

3　開催国と開催都市

人口規模の大きい大都市において開催される。今まで首都で開催されなかったのは，1974年の西ドイツ大会ぐらいであろう。これは当時のボンが仮の首都という性格を持つ小規模な人口の都市であったからで，統一後に首都の地位を回復したベルリンは，当時東西に分割されていたにもかかわらず，ドイツの試合がおこなわれた。[7]今回東京が全く名乗りを上げなかったのは，中央集権国家としてはかなり奇妙なことである。地方分権化が叫ばれる時代にはふさわしかったかもしれないし，同じ首都圏の隣接する，横浜市とさいたま市において決勝戦と準決勝戦がおこなわれたのであるから，実質的には差し支えなかったのかもしれない。青島知事の時代の東京都には財政上の問題というよりもワールドカップへの熱はなかったのであろう。

1994年のアメリカ大会でも首都ワシントンで5試合が行われたものの，開幕戦はシカゴ，決勝戦はロサンゼルスと重要な役割を果たしていなかった。

ヨーロッパで開催されてワールドカップの都市について都市規模，サッカーの盛んな都市という観点からどのような都市において試合が行われたかを検討してみる。開催都市については図1に入場者数で示しておいた。[7]

1）スイス（1954年大会）

第2次世界大戦後ヨーロッパで開かれた最初の大会である。永世中立国として戦争の被害がなかったことが開催の大きな理由であるが，FIFA（本部はチューリッヒ）の創立50周年がこの国での開催理由の一つ（後藤 p.85）ともいわれる。45カ国の参加申し込みがあり，日本も初めて地区予選に参加した（韓国が勝ってアジア代表として初出場）。16カ国が本大会に出場して，スイスはベスト8に進んだ。

スタジアムは比較的小さかったが[8]，観客は比較的多かった（表2，戦前の2大会や次回のスウェーデン大会より入場者数は多い）。6都市で試合がおこなわれたが，小都市であるイタリア語圏のルガノ（人口規模14位）では1試合のみ。あとはスイスにおける上位5大都市である，チューリッヒ，バーゼル，ジュネーブ，ベルン，ローザンヌで占めている。この国は首都

表2　1954年　スイス

都市	順位	1990人口	順位	1950人口	試合数	入場者数
Basel	2	178,428	2	183,543	6	241,000
Bern	4	136,338	4	146,499	5	222,000
Lausanne	5	128,112	5	106,807	5	199,000
Zürich	1	365,043	1	390,020	5	118,000
Geneve	3	171,042	3	145,473	4	62,000
Lugano	14	25,334	16	18,122	1	30,000
					合計	872,000
					1試合平均入場者数	33,538

資料:人口historische Statistik der Schweiz 1996
入場者数:原田編「ワールドカップ全記録」

のベルンよりもチューリッヒ，バーゼル，ジュネーブのほうが人口規模の大きな都市である。都市規模の１・２位の関係はほぼ順位—規模法則に応じている。ジュネーブでの開幕戦に始まり，決勝戦はベルンでおこなわれた。小都市ルガノでの開催を含めて，会場となった都市は３つの言語圏のバランスをとったことをうかがわせる。

現在の１部リーグはチューリッヒに２チームあるほかには，その他の開催都市にも１ずつある。2002－03年にかけてはバーゼルがチャンピオンズリーグでかなりの成績を残した。1998年日本がワールドカップ直前の合宿をシオン（人口規模13位）で行ったが，ここも強いチームがある。その際にユーゴスラビアとの公開練習試合を隣接するローザンヌで行った。

スイスは観光国であり，国土面積も狭くそこに鉄道網が発達しているので，都市間の移動や宿泊についての問題は少なかったと思われる。

２）スウェーデン（1958年大会）

1946年に立候補して，1950年に開催決定。第２次世界大戦の中立国として戦火をまぬがれて施設が整っていたことがスイスにひき続いてヨーロッパにおいて開催された大きな理由となる。スイスとともに人口規模の小さな国であるが，サッカーはそれなりに盛んで，その伝統は現在のヨーロッパサッカー連盟の会長をこの国から出していることでも知られよう。大会では２位という上々の結果を残した。サッカーとしてはペレのデビューとして記憶に残っている。これは55カ国が予選に参加し，主要サッカー国が全て加わり，本大会16カ国による「真の世界選手権になった」といわれる大会（後藤 p.103）で旧ソ連がはじめて参加した。アジア・アフリカからの出場はならなかった。また初めての海外向けテレビ中継がおこなわれた（原田 p.68）。

会場は南部の12都市に分散して開かれ（表３），人口５万人以下の小都市も含めて１試合開催という都市が３，２試合の都市が５と大半を占めている。首都ストックホルムで決勝戦（郊外のソールナ，ストックホルム都市圏内，2000年の人口56,953）を含む８試合おこなわれたが，人口規模第２の都市イェーテボリ[9]では７試合が行われて観客数はこちらのほうが多いという現象がおきている。全体に競技場の規模も小さく，とくに大会のために新スタジアムの工事はしていない（後藤 p.108）。イェーテボリにはプロチームが８あり，うち１部リーグに３チームが参加しているこの国最大のサッカー都市であるし（96/97年），またチャンピオンズリーグの開催も近年多い。都市規模で見ると１，２，３位の都市を含めて，上位10都市のうち７，上位20都市のうち11まで開催されていることになり，この意味でも地方分散の傾向がはっきりしている。強豪チームのあるのは上位３都市である。ウッデヴァッラを除くと全ての都市にサッカーチームがあり，最近ではイェーテボリ，マルメ，ストックホルム，ハルムスタードなどの都市のチームが国内の強豪のようである。

表3　1958年　スウェーデン

都市	順位	2000人口	順位	1960人口	試合数	入場者数
Malmö	3	262,397	3	228,878	4	79,370
Halmstad	17	85,742	16	39,064	2	24,821
Helsingborg	9	118,512	7	76,504	2	38,981
Norrköping	8	122,896	4	90,680	3	39,983
Västeras	6	127,799	6	77,778	2	21,808
Örebro	7	124,873	8	75,379	1	13,550
Eskilstuna	16	89,135	11	58,793	1	13,103
Stockholm	1	754,948	1	808,484	8	227,360
Sundviken		36,805	39	21,934	2	28,653
Göteborg	2	471,267	2	404,349	7	272,230
Borås	13	97,347	9	67,272	2	38,039
Uddevalla	42	49,255	18	34,166	1	21,000
				合計	35	818,898
				1試合平均入場者数		23,397

資料　人口：Sverges Officiella Statistik 1961
Statistik Årsbok för Sverige 2003
入場者数は表2に同じ

３）イングランド（1966年大会）

サッカーの母国といわれるイングランドで初めておこなわれた大会である。そして決勝戦では疑惑のゴールによって西ドイツに勝ってイングランドが優勝したという記憶が残る。16カ国による32試合が行われ，首都のロンドンで10試合，その他の６都市では，リバプールの５試合，シェフィールドの４試合，あとの４都市は３試合と首都への集中が高い（表４）。ロンドンで

はウエンブリーとホワイトシティー（オリンピック用スタジアム）の２ヵ所で試合がおこなわれた。もちろん開幕と決勝はウエンブリーでおこなわれた。ロンドンは首位都市の性格が強いイギリスの性格をよく反映していて，有力なプロチームが８あり，現在のプレミアシップ20チームのうち６チームが存在している（2002—03）。このようにサッカーチームが多い都市は他にどこにもない。

リバプール，マンチェスター，シェフィールド，バーミンガムはともに２つの強力なチームが存在する都市であり，サンダーランドも19世紀末から20世紀前半にかけては強いチームがあった（リーグ優勝６回）というサッカー都市が選ばれている。サンダーランドに近いミドルズバラが会場になった理由は不明であるが，イングランド北東部への配慮ということになるのだろうか。近年なら活躍しているニューカッスルが選ばれてもおかしくはないのだが。人口規模では1960年代中期でみれば上位から５位まで順当に選ばれている。現在との順位の逆転はあるが（リーズが３位に入っている）２位のバーミンガム，４位のシェフィールド，５位リバプール，６位マンチェスターで開催され，順当に大都市[10]が会場となっている。リバプールを除くと典型的な工業都市であり，労働者階級がこれらの都市のプロチームを支えていることを物語っている。あとの２都市のうちサンダーランドは30万人弱の中位の人口，ミドルズバラは10万人台の小都市である。このような小都市の場合に宿泊施設が十分かどうかという点に気がかりがある。リーズには２チームあり，リーズユナイテッドが1965年にFAカップの準優勝をしているが，この大会の後になってUEFAカップなどに出場するようになった。2002－03シーズンで言えばシェフィールドの２チームはともにプレミアシップから落ちている。

イングランドは比較的狭く，ここも鉄道網が発達しているので，予選の試合会場の地域差による不平等は少ない。サッカーの盛んな国であるゆえに，１試合あたりの平均観客数は４万５千人台とその当時としては多い方になる。

表4　1966年　イングランド

都市	順位	1967人口	順位	1996人口	試合数	入場者数
London	1	7,880,760	1	7,074,265	10	723,500
Birmingham	2	1,091,500	2	1,020,589	3	140,370
Sheffield	5	534,100	4	530,375	4	140,127
Liverpool	3	705,310	5	467,995	5	224,829
Manchester	4	606,520	6	430,818	3	88,369
Sunderland	33	219,270	21	294,261	4	93,122
Middlesborough		154,580	101	146,778	3	54,629
					32	1,464,944
				1試合平均入場者数		45,780

資料　人口:国連世界人口年鑑
　　入場者数は表2に同じ

４）（西）ドイツ（1974年大会）

戦後の復興が進み，経済大国となっていた当時の西ドイツで第10回大会が開かれた。分権主義の国だけあって38試合を９都市で行い，５試合開催が４都市，４試合開催が３都市，３試合開催が２都市と分散させた。西ベルリンでも３試合おこなわれたが[11]，開幕試合はフランクフルト，決勝戦はミュンヘンであった。後者は1972年のオリンピックスタジアムである。今大会も開催国の西ドイツが優勝したが，内容的にはオランダチームのヨハン・クライフとトータルサッカーが強烈な印象およびその後の戦術にも影響を与えた大会であった。決勝戦がはじめて日本でもライブ中継されたことで記憶に残る大会であった。

都市規模から見ると（表５），上位12位までの人口50万人以上の都市のうち，４位のケルン，６位のエッセン，10位のブレーメン，11位のデュースブルクの４都市が選ばれていない。シャルケ04という名門チームのあるエッセンに近い工業都市ゲルゼンキルヘンが1974年当時には人口30万人台の順位14位が選ばれるという大都市を優先した順当な選択となっている。現在のサッカーの盛んな都市はミュンヘンと，ドルトムントである。デュッセルドルフは1950年代には強かったが現在ではブンデスリーガには入っていない。フランクフルトも70年代には強かったが，やはり現在では２部に落ちている。この２つを除くと７つの都市のチームは統一後かなりの変動があったにもかかわらずブンデスリーガの上位にいて盛んである。この大会前後

強かったのはメンヘングランドバッハのチームであり，人口は26万人台であるがデュッセルドルフに近いために，ケルンとともに地域的なバランスから選ばれなかったのであろう。開催都市はノルトライン・ウエストファーレン州を中心に主な州に分散させて均等に試合数を割り当てている。

1次リーグの地域別割り振りを見ると，開催国西ドイツが入っている第1組はベルリンとハンブルクで，第2組はフランクフルト，ドルトムント，ゲルゼンキルヘン，注目のオランダが入る第3組はデュッセルドルフ，ハノーバー，ドルトムント，第4組はミュンヘンとシュトゥットガルトと移動距離は比較的短い。2次リーグとなると，A組はハノーバー，ゲルゼンキルヘン，ドルトムント，B組みはデュッセルドルフ，シュトゥットガルト，フランクフルトと1次リーグよりまとまっていて，3位決定戦と決勝戦がミュンヘンでおこなわれたという合理的で，負担の少ない割り当てであった。ドルトムント，ゲルゼンキルヘン，デュッセルドルフはライン工業地域を軸として組み合わされてまとまっているので，宿泊移動には問題がなかったと思われる。グループ間の都市は離れていても列車で2時間程度の距離である。

表5　1974年　西ドイツ

都市	順位	1975人口	順位	1997人口	試合数	入場者数
Berlin	1	2,984,837	1	3,425,759	3	127,200
Hamburg	2	1,717,383	2	1,704,731	3	126,000
München	3	1,314,865	3	1,205,923	5	247,000
Frankfurt am M	7	636,197	5	643,469	5	287,000
Dortmund	8	630,309	7	594,866	4	182,900
Stuttgart	9	600,421	8	585,274	4	213,055
Düsserdorf	6	664,338	9	570,969	5	223,385
Hannover	12	552,956	12	520,670	4	162,163
Gelsenkirchen	16	322,584	20	286,432	5	175,102
					38	1,812,453
				1試合平均入場者数		47,696

資料表4に同じ

さて，2006年には12都市でおこなわれる予定であるが，上記の9都市に加えてケルン，カイザースラウテルン，ニュルンベルグ，それに旧東ドイツ地域からライプツィヒで新たに試合が行われるのである。カイザースラウテルンは小都市であるがサッカーの強い街である。ニュルンベルクはそれほど強くないが選ばれて，より強いブレーメンが落ちた。

5）スペイン（1982年大会）

スペインでは24カ国に本大会出場国が増え，52試合になっているが14都市という現在までのところもっとも多くの都市に会場を分散させて開いた（表6）。オビエド，エルチェというかなり規模の小さな都市まで含まれているが（それでも19万人台），さすがにサッカー大国だけあって全ての都市にプロチームがある。それだけの開催受け入れ地盤があったということになる。2つの大中心地バルセロナで開幕し，マドリードで決勝戦を終えた。この2都市の試合数が多いが，他はセビリャの4を除いて全て3試合である。基本的には大都市を中心にしており，マドリードから上位7位もビルバオまでは連続していて，8・9位都市ではおこなわれていないが，以下18位のラ・コルニャまで12都市が占めてる。人口順位に忠実な選定がなされている（スイスは上位5都市だが，大会規模が小さかった）。

現在有力チームがあって会場にならなかった主な都市としては島嶼を除くとサン・セバスチャン，サンタンデルくらいか。どちらも人口18万人程度である。バレンシア，セビリャ，ビルバオ，ヒホンを除くと他の地方都市での1試合当りの入場者数は少く，2万人以下もあった。

1次リーグは6組に分かれた。A組はビゴ，ラ・コルニャの大西洋岸ガリシア地方，優勝したイタリアが入っていて涼しさが体力消耗を減らしたといわれている。B組はヒホン，オビエドのビスケー湾地方の涼しい場所で，移動距離も少ない。準優勝した西ドイツもこの地方にいた。C組はバルセロナ，アリカンテ，エルチェという地中海岸のかなり移動距離のあるグループである。1次予選を通過したベルギー・アルゼンチンともに2次予選では最下位に落ちた。D組はビルバオ，バリャドリードという大西洋岸と内陸都市の組み合わせであった。E組は地元スペインで，バレンシア，サラゴサという地中海岸と内陸という暑い地域の組み合わせで

あった。F組はセビリャ，マラガという距離はさほど離れていないが最も暑い地区であった。2次リーグはA，C組はバルセロナ，B，D組はマドリード，準決勝がバルセロナとセビリャ，3位決定戦がアリカンテという選定であった。移動距離上の問題は少ないが，気温の較差は大きく，選手の身体への負担に最も大きな差が現れた大会であったようである。

表6 1982年 スペイン

都市	順位	1981人口	順位	1998人口	試合数	入場者数
Madid	1	3,158,818	1	2,823,667	7	424,000
Barcelona	2	1,752,627	2	1,454,695	8	451,000
Valencia	3	744,748	3	735,738	3	147,000
Sevilla	4	645,817	4	695,266	4	228,800
Zaragoza	5	571,855	5	600,781	3	65,000
Malaga	6	502,232	6	542,981	3	90,000
Bilbao	7	433,115	7	351,048	3	125,000
Valladolid	9	320,293	10	316,956	3	83,000
Vigo	14	261,331	13	286,774	3	72,000
Alicante	17	245,963	14	272,810	3	92,500
Gijón	15	256,433	15	264,381	3	125,000
La Corňa	18	231,721	18	241,443	3	55,000
Oviedo	22	184,473	22	198,758	3	60,500
Elche	25	164,779	24	191,660	3	75,000
					52	2,099,723
				1試合平均入場者数		40,379

資料 表4に同じ

6）イタリア（1934,1990大会）

イタリアは第2次大戦前と1990年との2回ワールドカップを開催した。1934年の第2回大会は16の参加国,17試合を8都市で行い，90年は24カ国，52試合を12都市でおこなった。34年に会場になって90年に行われなかった都市がトリエステ，90年に新たに会場となったのが，パレルモ，バリ，ヴェローナ，カリアリ，ウディネの5都市で，シシリア，サルディニア2島の都市が含まれているのに特徴がある（表7）。フーリガンで混乱する恐れのあるイングランドとオランダのF組をここに押し込めたといわれている。[12]もちろんこれらの都市全てにプロチームが存在する。それほどサッカーの強いチームがなかった都市トリエステが選ばれたのは，ムッソリーニの時代にトリエステをめぐる帰属の問題の正当性を示したかったという，政治的配慮からではないか。

都市規模からいえばウディネ（ジーコが所属していたウディネーゼというチームの本拠地）は人口10万人以下の小都市であるが，首都の

表7 1990 1934 年 イタリア

都市	順位	1991人口	1990 試合数	入場者数	1934 試合数	入場者数
Roma	1	2,693,383	6	440,238	3	90,000
Milano	2	1,371,008	6	440,130	3	73,000
Napoli	3	1,054,601	5	273,741	2	16,000
Torino	4	961,916	5	307,146	2	28,000
Palermo	5	697,162	3	99,997		
Genova	6	675,659	4	124,741	1	21,000
Bologna	7	404,322	4	125,401	2	38,000
Firenze	8	402,316	4	146,056	3	86,000
Bari	9	341,273	5	217,996		
Verona	13	252,689	4	137,969		
Cagliari	17	203,254	3	105,464		
Udine		95,098	3	97,485		
Trieste	15	229,216			1	9,000
			52	2,517,348	17	361,000
				48,410		21,325

資料表4に同じ

ローマに始まる上位9位のバリまでは全て含まれていて，さらに13位のヴェローナが続く。カリアリも20万人都市である。80年代末から90年にかけて，マラドーナのいたときのナポリは強かったが，それを除くと北部のミラノ，トリノが圧倒的な強さを示すサッカー都市である。それに近年ではローマが加わった。南部への地域的なバランスということで，バリやパレルモ，カリアリが選定されたのではないか。サッカーの盛んな国であり，人口規模が大きい都市が会場となっている。

開幕試合がミラノ（アルゼンチン対カメルーン）で行われて，決勝戦はローマで行われた。6組に分かれたグループリーグはイタリアの入るA組がローマ，フィレンツェ。B組は優勝したアルゼンチンを含むバリ，ナポリとミラノで1試合，C組はトリノ，ジェノヴァという近い組み合わせ，D組は準優勝した西ドイツを含むがボローニャ，ミラノ，E組はヴェローナ，ウディネ，F組が先に述べたパレルモ，カリアリという2つの島で行われた。決勝トーナメント1回戦はフィレンツェ，ウディネと2つの島を除く8都市で，準々決勝4試合がフィレンツェ，ローマ，ミラノ，ナポリ，準決勝がトリノ，ナポリで行われアルゼンチンとカメルーンを除くと移動の負担はそれほど大きくない。イタリアは主にローマで試合ができて有利であったがナポリへ移動してマラドーナのいるアルゼンチンに準決勝で負けてしまった。

7）フランス（1998年大会）

フランスも1998年に1938年に次いで60年ぶりの２度目の大会である。そして98年に地元開催の地の利を得て初めて世界一になれた。1938年には14カ国が参加して18試合が９都市で行われた。98年は32カ国による64試合を10都市で行った（表８）。日本がはじめて本大会に出場できた大会として歴史に残る。両年ともに開催されたのはパリ，ボルドー，マルセイユ，トゥールーズの４都市のみである。1938年に開催されて98年に開催されなかったのはストラスブール，ル・アーヴル，リール，アンティーブ（現在はニース都市圏，人口規模５位，に含まれている），ランス（Reims），の５都市で，これらは近年サッカーが余り強くない都市（主に２部リーグ，ただし前３都市はワールドカップ後１部に昇格）である。また1998年のみはサン・ドニ，ランス（Lens），リヨン，モンペリエ，ナント，サン・テティエンヌの６都市である。

新設の競技場は開幕戦と決勝戦を行ったパリ北郊のサン・ドニのみであって，その他の都市は改修（全てをいす席にした。そのために収容人員が減った競技場もある）。

パリ都市において開幕試合と決勝戦の両方を同一会場で行ったところにパリ一極集中というこの国の性格が強く反映している。都市順位で言えば，４・５位のリール，ニースが抜けていてトゥールーズ，ボルドー，ナントと８位まで続き，飛んで10位のランス，さらに18・19位のサン・テティエンヌ，モンペリエが加わる。やや南部に多いという傾向が見られる。この当時サン・テティエンヌのみは２部リーグに落ちていたが，かつて組織委員長のプラティニが所属していたチームの本拠地であることからえら選ばれたのであろう（98－99年には１部昇格，現在また２部）。またリールとニースはその後強くなって１部リーグの上位にいる。ストラスブールも選ばれなかったのは会場選定時にチームが弱くて盛り上がりが少なかったためと見られる（現在は１部）。逆にランスはこの大会が始まる直前の97—98年に初めてリーグ優勝して，

表8　1998·1938年　フランス

都市	順位	1999人口	1998 試合数	1998 入場者数	1938 試合数	1938 入場者数
Paris	1	2,125,246	6	273,000	6	201,000
Marseille	2	1,349,772	7	394,587	2	52,000
Lyon	3	1,348,832	6	251,572		
Toulouse	6	761,090	6	216,460	2	15,000
Bordeaux	7	753,931	6	190,700	3	53,000
Nantes	8	544,932	6	239,757		
Lens	10	518,727	6	238,194		
Saint-Etienne	18	291,960	6	198,992		
Montpellier	19	287,981	6	200,650		
Saint-Denis		85,832	9	713,815		
Lille	4	1,000,900			1	15,000
Strasbourg	11	427,245			1	13,000
Le Havre	25	248,547			1	11,000
Reims	29	215,581			1	9,000
Antibes		72,414			1	7,000
			64	2,782,650	18	376,000
		1試合平均入場者数		43,479		20,888

資料　表4に同じ

炭鉱が閉鎖されて衰退した地域にあって盛り上がっていた。

最初は従来どおり，比較的近い都市群の中で１次リーグを行う計画であったが，それぞれの会場で多くのチームが見られるようにと１次のグループリーグは各組とも６試合全て異なった都市で行われるようになった。これは地元の観客に対するサービスということになろうし，３試合をセットにチケットの一部が販売されたという。したがって同じ組にあっても試合をする都市の組み合わせには違いがあった。日本の場合はトゥールーズ，ナント，リヨンという組み合わせであった。これにより移動にともなう負担はかなり平準化されていたといえる。そのぶん応援する側も移動に忙しかった。開催地側からすると数多くの国のチームを見ることができるようになっている。こうしたシステムは2002年の大会にも引き継がれた。それに合わせて，準備のための本拠地の選定がそれぞれのチームにとって重要な決定事項となった。基本的に選手の移動は貸し切りバスか，チャーター機を使ったと思われる。応援・見物する客の多くは列車の利用であろう。パリを中心とした放射状に展開したTGV（高速鉄道）または全国に張り巡らされた高速道路が利用できた。中央集権国家のゆえに，鉄道・道路ともにパリを中心に放射状に整備されていたが，逆に地方都市間の移動はかなり困難がともなった。

ただしランスとサン・テティエンヌを除く開

催都市には飛行場があり，航空便を利用することが可能であった。ランスはリール，サン・テティエンヌはリヨンに近いことから，飛行機の利用ができたはずである。(続)

註

1）しかしプロサッカーリーグが未熟であった1994年のアメリカ大会，そしてプロリーグの歴史が短い日本と韓国とは，誘致によるサッカーの普及と地域活性化と言う期待が強く押し出され，従来とは異なった面を示しているといえよう。

2）FIFAは5月の理事会では2006年ドイツ大会の出場枠を36に増やすことを決定した。開催国ドイツでは反対している。

3）初出場といっても1990年にユーゴスラビア代表として経験をつんだ選手がいた。また独立国家としてはじめて参加したことで，世界に対してアピールする機会を得たというモチベーションの高さはぬきんでいた。

4）2004年のヨーロッパ選手権，ポルトガル開催に向けて50カ国が予選に参加している

5）ちなみに南アメリカが最も高い勝率で0.466，次いでヨーロッパの0.422，北・中アメリカは0.231でアジアより高い。

6）イギリスはサッカー協会が4つに分れている。特にウェールズとイングランドとを分けた人口数を見出すのが難しいので除外する。4協会の合計勝点は94，2000年の総人口を59,415千人とすると勝点係数は15.8になり，ドイツやイタリアと同じレベルになる。

7）2回開催されたイタリア，フランスについてはそれぞれ1990，1998年のデータのみで示した。

8）ベルンとバーゼルは5万人，他の都市は小さかった（後藤 p.84)。

9）人口規模の第1位（100）に対する第2位都市の比率は63と高い。オランダの82，ベルギーの70に次いでヨーロッパでは第2位都市の規模が大きい。

10）イギリスの大都市の多くは1990年代よりも60年代の方が人口が多い。

11）西ベルリンでの開幕試合は西ドイツ対チリ。東ドイツも同じ組にはいっていた。両国の対戦試合はハンブルクで行われた。

12）スペインは移動の負担が大きいマリョルカ島，カナリア諸島を使わなかった。

文献

後藤健生（2002)：『ワールドカップ』中央公論社

松岡完（1994)：『ワールドカップの国際政治学』朝日新聞社

原田公樹編（2002)：『ワールドカップ全記録2002版』 講談社文庫

デイヴィッド・ゴールドブラット，野間けい子訳(2002)：SPIRITS特別編集版2002　ワールドカップ32カ国・データブック　ネコ・パブリッシング

国際連合統計局編：『国際連合世界人口年鑑』 各年度版

Augustin，J－P.(1995)：*Sport géographie et aménagement*. Nathan

Hammond,M. ed：*The European Football Yearbook* 96－97. Sports Projects Ltd.